

| | |
|------------------|---|
| Title | 小泉信三著 社会組織の経済理論的批評 |
| Sub Title | |
| Author | 野村, 兼太郎 |
| Publisher | 慶應義塾理財学会 |
| Publication year | 1922 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.1 (1922. 1) ,p.146- 148 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 新刊紹介 |
| Genre | Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220101-0143 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ないかも知れぬが廣くは亘つて居る。『聯邦職業局』編纂の叢書五六冊の説く所は簡單ながら本書に於て窺はれ得やう。 (増井幸雄)

小泉信三著 『社會組織の經濟理論』

的批評

四六版四〇三頁
定價金 參圓
下出書店發行

本書は小泉教授が最近一年數箇月間の勞作中専門學術雜誌以外に於いて發表されたもの、大部分を採録されたものである。故に教授最近の傾向を知ることが出來よう。收むるところ「人口原則と社會問題」「人性樂觀と社會組織」「小工業と無政府主義」「不勞取得と土地社會主義」「フエビヤン社會主義の功過」「正統派經濟學と社會主義」「ロオドベルトスの國家社會主義」「シヤアル・フリュエエの社會的空想」「流行と資本主義」「社會的法的經濟學派」「失業問題概論」「キリヤ

ム・モリスの無何有郷消息」「功利主義的法律及び政治論」の十三篇の外、本誌々上に掲載された新著評論十一篇を加へてある。上述の諸論文はすべて經濟學者としての教授が社會問題、社會組織に關する諸學者の議論を批評若しくは紹介されたものである。従つて是等から純粹に教授の立場を掴むことは困難であるかも知れない。然し尙ほそれ等の論述の際に漏された著者の言葉から其の立場の一端を覗ひ知ることが出來るだらう。

社會組織改造の可能性を認むるものは、其の程度の差違こそあれ、すべて人生に對する樂觀說を採る者である。教授も亦此の意味に於いて樂觀說に左擔するものであらう。従つて自然法則としてのマルサス人口論に對して何等かの解釋を與へなければならぬやうになる。社會主義共產主義は、少くも下層階級の物質的負擔を軽減して、其生活に餘裕を生せしめん事を期するものであるが、若し人口原則が眞理であつて、生活上に生じたる餘裕は、必ず之を消滅せしめ

る程度迄、人口の増殖を促さなければ已まぬものとすれば、一切の社會改造運動は畢竟地獄に於ける Sisyphus の努力である(二頁)と云ふ問題が提起されるのは極めて當然である。是に對する教授の態度は決して所謂樂天論と等しくない。社會主義社會に於ける人口に就いてカウツキイを論評せられた教授は寧ろカウツキイに反して社會主義社會に於いても亦人口の増加を認め、斯る社會に於て、一度實現せられた幸福なる状態を維持する爲め、人口増殖の人為的制限を行ふ事は、恐らく已む事を得ざる必要事かと思ふ。勿論マルサスの唱へたものと、意味も方法も同一ではないが、『道徳的制限』は社會改造論者の直ちに無用として廢棄すべからざるものと思はれるのである。(四二頁)と結論されて居る。斯くの如き論斷に到達するものは人間の利己心を承認して、「その利己心の自由發動は、結果に於て社會公共の利益となるものと認め」て樂觀するものではなく、寧ろ自由放任を非とするものでなければならぬ。然し又他方教授

はクロポトキンの如く人間性のよき一面を樂觀視するものでもない。「私は人間を事實以上に善きものと觀ると云つた。換言すれば彼れは人間を信じ過ぎて居る。(七二頁)とクロポトキンを批評されて居る。蓋し教授の立場は中庸にある。ゾムバルトの「富澹なる想像力と機警なる著眼」を認められても、尙ほ概括に急なるを排斥する、如く、(序)其の個々の心理學的研究に信を置かるゝも、總括的結論に俄かに同せられて居ないやうである。是は又一面教授の慎重なる態度を語るものであらう。「前代の人の樂き上げた足場の上に、更に何物かを築かうとせず、前人の事業とは没交渉に、空に憑つて獨斷的に、當て物のやうに、何か新しい事に思ひ着くのが所謂獨創であるならば、思想史上の偉大なる人物には、みな獨創的の評語を許す譯に行かぬ。獨創を尙ぶのは固より當然の事であるが、それが前人の業績に通曉する勞を怠る口實となつてはならないのである。(一五三頁)の一節は明に教授の態度を示すものであり、一面輕

卒なる論断を嫌悪さるゝと共に、他面すべてに
通曉せんとする努力を尊しとする意氣を表して
居る。従つて比較的確實性を有する心理的研究
に對し多くの興味を有さるゝも、其の普遍的斷
定に至つて多少の躊躇を示さるゝ所以である。
社會改造の問題に就いても同じ様な傾向を有た
れる。一大奇蹟の行はれて急激に理想社會が出
現しようとは教授の考へ得ざるところである。
此の點に於いて教授は革命を思はず發展を信ず
る人である。一切の崇高悲壯を否認する「Cyni-
cism」を排斥するが、他方崇高がり、悲壯がるこ
とをも嫌悪する教授の理性は社會改造には忍耐
と長年月を要するが、又現狀に對する「神聖な
る不平」を忘れざることを見せしめた。而してこ
れを忘れた瞬間に、緊張は失はれて、是れに伴
ふ人心淨化の作用も亦た停止する。(一五二頁)
と云はれて居る。此の點から見ても亦教授が單
純に唯物論を容認せず、人間性——殊に過激な
らざる、即ち、理性に多大の信を置くものと云
へよう。斯く借せられる結果として人類の進歩

は、多少の例外はあるとしても、其の本來の過
程を一步步動いて行くものと思考されるので
はなからうか。
教授の本書に論せらるゝところは、すでに述
べたる如く、先人の議論の批評紹介である。然
し批評を下す時には必ず評者の立場が生ずる。
今本書を江湖に紹介せんとするに當つて試みに
是を摘出し見たのである。斯くの如きは却つ
て其の眞意を誤まるものかも知れない。又其の
當不當は本書の諸論文の目的——經濟學の立場
より社會の諸問題を批評せんとすることに對し
て何等の影響を有するものでないことは云ふま
でもない。最後に本書の讀者は何人も感ずるや
うに、教授の冷徹明哲なる論述を嘆賞せざるを
得ない。妄評妄断の罪を深く謝する。
(野村兼太郎)

野村兼太郎著 社會生活と理想哲學

四六版三四一頁
定價二圓八十錢
下出書店刊行

現代の社會思想における一新傾向は、その哲
學的解釋であらう。野村氏の本著は氏が「理想
的見地に立つて、社會生活を考察したものであ
る。」(序文)本書第一篇は大體において著者の立
場を示すもので、著者はこゝに價值否定の社會
觀と價值肯定の社會觀とを對立せしめ、カアル・
マルクスの説をして前者を代表せしめ、文化主
義の社會哲學を以て後者を代表せしめる。著者
は經濟的必然論たる「マルクス主義的世界觀の
缺點は此の人類社會を單に機械的に因果的に觀
察して全然沒價值なる唯物論的定命主義に墮し
たと云ふ點にあり」とし(二二頁)「自己の自由
意志を以てすべてのものを觀察し、其の自己の
天賦の才能を出來得る限り發揮して、自己を主
張せんと欲する價值の世界がある。此の世界に

おいては吾人は常にある理想を結局の目的とし
て考へる。而してその理想に到達せんとする努
力するのである。吾人は此の理想を文化價値の
完成であると思惟する。此の文化價値は吾人が
不斷に自己の天賦の才能を十分に發揮せんとす
ることによつてのみ到達され得る。斯くの如き
文化價値を絶えず創造して行かうとするところ
に吾人のすべての價值判断は其の基準を發見す
ることが出来る。(一七頁)即ち「各自の個々の
價值完成に努力し得ることがその理想である。
而して斯くの如き個々別々の價值完成を歸一統
一するものとしてこゝに先天的なる文化價値の
觀念を基本とするのである。而して少くも
も吾人が目して理想的社會であるとするところ
のものは斯くの如き文化價値の建設に各人が其
の自由意思によつて努力し得るものでなければ
ならない。」(二〇—二二頁)而して人類の本能
的生活において最も強烈であるのは生存欲であ
る。かく生存せんとするには先づ物質的獲
得を必要とする。こゝにおいてあらゆる文